

愛恵だより

第 11 号

2023年1月1日 発行

発行：公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒114-0015 東京都北区中里 2-6-1 愛恵ビル5F
電話：03-5961-9711(代) / FAX：03-5961-9712
<https://www.aikei-fukushi.org/>

「愛恵」の題字は初代理事長 三吉 保 氏による

今をどう生きるか



公益財団法人 愛恵福祉支援財団
評議員 内田 望

1997年に大学を卒業し、もう25年が経過しました。そのほとんどの期間、地域医療に従事しています。以前はよく「専門は何科ですか？」と聞かれました。その都度、内科、総合診療、プライマリケア、緩和医療、などと答えてきましたが、いまだに私自身がこれと胸を張って言えるものはありません。自信がないのか気にしていないのか…。ただ、終末期医療には力を入れてきました。医師になって3年目、研修医を終了したばかりで半人前もいいところでしたが、配属先の高知の山間地域にある病院で膵臓癌末期の40代の女性の主治医になりました。進行癌で手術はできず抗がん剤治療をしていましたが、本人には癌であることが告知されていません。「膵臓に腫瘍があり、癌になってはいけないから」という苦しい理由で抗がん剤を使っていましたが、彼女は次第に不信感を抱きます。余命1か月ほどと思われたある日、関西で鍼灸の治療を受けると退院され、ホテルでご主人から全てを告げられました。その後旅立たれた噂を聞いてはいましたが、半年後ご主人が奥様について綴った本を自費出版したとの記事を新聞で読みました。早速購入しましたところ、300ページほどの中で、私が出てきたのはわずか数ページ。医療者として患者さんのことをある程度わかっているつもりでも、実際にはその人の数ページしか関わっていないことに改めて気づかされました。同じころやはり癌末期の60代の男性の主治医にもなりました。脊髄に転移し、下半身不随となり半年間頑張りましたが、私は何もできませんでした。そんな医師3年目でしたが、これからは症状を緩和するだけでなく人としてどう支えていくか（全人的医療）が最も

重要であるという想いを抱き、医師になって8年目に1年間淀川キリスト教病院でホスピスを学ぶ機会が与えられました。

淀キリでの研修後は地域医療に戻りあちこち転々としてつつ現在に至りますが、Death Education（死への準備教育：死を見つめることは、生を最後までどう大切に生き抜くか、自分の生き方を問い直すことだとアルフォンス・デーケン先生が提唱）が私のライフワークとなりました。依頼があれば、小中学生には命の授業を、地域住民や医療介護職のスタッフには「どうやって旅立ちたいか」といったテーマで講演し、時には入棺体験を企画するなど、「死」をタブー視せず、いかに生きるかということを常に問いかけています。

医療の現場では思いがけない突然の悲しい別れに直面します。脳血管疾患や心疾患、事故などは本当に突然やってきます。先日も私の子と同世代の大学生が急性の疾患で旅立ちました。私ですら思い出すと胸が詰まりそうになります。ご家族の思いは計り知れません。2年以上前から続くコロナ感染症もその一つです。コロナ感染はほとんどの人が無症状から軽症で済みますが、時に重症化し命の問題になることは皆さんご存じのとおりです。数日前まで元気だった人でも一気に病状が悪化します。お元気になって戻ってこられた方の話を聞くと、まさに「死の陰の谷」を歩いていたんだなと思わされます。コロナが流行し始めた2年前「これはだれもが死ぬ存在である、と神様が世の人々に教訓を与えているような気がする」と、仲良しのクリスチャン医師からメールが届きました。私もまさにその通りと感じ入ったことです。人はいつまでも元気であり続けたいと願うものですが、もちろんそんなことはあり得ません。ならば、私たちは今をどう生きるのか。いえ、自分で生きているのではなく、生かされていることを感じて生きているか。私があちこちで人に語り掛けている場合ではなく、自分自身に問いかけていかななくてはいけないなあと、この文章を書きながら思ったことでした。（小鹿野中央病院 院長）

コロナ禍のなかで2022年度の事業活動を進めました

なかなか終息しない新型コロナの感染状況ですが、必要な感染対策を講じて各種事業を再開しています。

最期まで自宅で一人暮らす

上野千鶴子さんに聞く、
住み慣れた自宅で自分らしく最期まで生きる術

講師 上野千鶴子氏

東京大学名誉教授、認定 NPO 法人 WAN 理事長

2022年度
愛恵福祉支援財団主催公開講座

日時：2022年10月5日

13:30～15:00

会場：東京 YWCA カフマンホール



後藤さくら 撮影

定員 100 人はすぐに満たされるほど、講師、演題共に関心度の高い講演会であった。参加者の平均年齢は 68 歳で、高齢に向かう中での独居、特に 80 代の参加者が 12 人を数え切実な課題であることが感じられた。

豊富な参考資料、提言資料をもとに大変分かりやすい講演だった。

講演後の感想の一部を紹介したい。

- あいにくの雨にもかかわらず満員での開催は、世間が求めているテーマだと実感した。
- 日本の高齢化社会の現状についてより深く理解できた。在宅看取りは確かにこれからの高齢社会の最優先策と考えられる。
- 夫婦ふたりだが、一人になったらどうなるかがよくわかった。準備しなくては。
- 「在宅には覚悟が必要」とのこと。難しい！
- ユーモアがあり、半分泣けそうな、私たちの心をぎゅっと掴まれてしまったような素敵な話だった。



パーソン・センタード・ケア について学ぶ

認知症をもつ人への理解とコミュニケーション

日時 2022年11月16日(水)

場所 愛恵福祉支援財団 1階会議室

研修1 「パーソン・センタード・ケアの理念」

講師 田邊 薫氏

和光病院医療福祉相談室長

NPO 法人パーソン・センタード・ケアを考える会

研修1では、認知症ケアの最前線でご活躍の田邊薫講師から具体的な事例をもとに学ぶ機会が与えられた。

参加者も介護の現場でご苦労されている方なので基礎理論とともに演習ワークをとおして、よりよい支援へのサポートの基本を学ぶことができた。

演習1 認知症の方の立場に立った時、どのような気持ちを抱いたか。

演習2 ケアの提案（・明日からできること ・心理的ニーズを満たすためにできること）



研修2 「『父・長谷川和夫との日々と』

パーソン・センタード・ケア」

講師 南高まり氏

立川市役所デイサービス勤務

日本ユマニチュード学会認証審査委員

研修2では、認知症の権威であった故長谷川和夫医師が、ご自身が認知症になってもなお、認知症で苦しむ人に寄り添うことを忘れず、そのキリスト者としての生涯について、娘として身近に接した南高まり講師と交わした折々の会話の紹介を通して知ることができた。

◆ 参考資料 ◆

【長谷川式認知症スケール】

設問	評価/点数
①年齢はいくつですか (年齢)	±2年の誤差まで→1点
②今日は何年ですか。何月ですか。何日ですか。何曜日ですか。(日付の見当識)	それぞれ正解ごとに→各1点(計4点)
③私たちが今いるところはどこですか (場所の見当識) ※5秒後にヒント「家ですか?病院ですか?施設ですか?」	・自発的に正解→2点 ・ヒントで正解→1点
④これから言う3つの言葉を言ってください 「桜・猫・電 車」※答え終わったら「後でまた聞きますのでよく覚えておいてください」と伝える (即時記憶)	それぞれ正解ごとに→各1点(計3点)
⑤100から7を順番に引いてください (計算)	・93が答えられた→1点 ・86が答えられた→2点
⑥私がこれからいう数字を逆から言ってください。 「6-8-2」「3-5-2-9」 (逆唱)	・「6-8-2」に正解→1点 ・「3-5-2-9」に正解→1点
⑦先ほど覚えてもらった言葉をもう一度言ってください。 ※ヒントを出す場合「植物・動物・乗り物」 (遅延再生)	・自発的に正解→各2点(計6点) ・ヒントで正解→各1点
⑧これから5つの品物を見せます。(視覚記憶) それを思えますので何があったか言ってください ※時計/鍵/タバコ/ペン/硬貨など必ず相互に無関係なもの	それぞれ正解ごとに→各1点(計5点)
⑨知っている野菜の名前をできるだけ多く言ってください (語想起・流暢性)	・0~5個→0点 ・6個→1点 ・7個→2点 ・8個→3点 ・9個→4点 ・10個以上→5点

〈パーソン・センタード・ケアとは〉

認知症をもつ方々に、一人の人として、周囲の人や社会との関わりを持ち、受け入れられ尊重され、それを実感しているあり様。人として、相手の気持ちを大事にし、尊敬し合うこと、互いに思いやり寄り添い、信頼し合う、相互関係を含む概念である。

その人らしくより良い生活ができるための支援の方法を仲間と共に実践

認知症ケアの文化をつくっていく

ことを目指しています。

<当日の研修より>

2022年度 国際支援 **バングラデシュソーシャルワーク**

バングラデシュでは学問としてのソーシャルワークは、70年以上にわたって様々な大学で教えられてきたが、実践の場では専門職として知られているに過ぎない。このような実情の中で、愛恵福祉支援財団の支援により、下記のような研修が行われている。

1. 研修の背景

コロナ・パンデミックの影響により、中等教育レベルの子供たちは精神衛生面で大きな危機に直面している。そこで「コミュニティ・ソーシャルワーク実践開発財団」のチームによる「中高生へのスクールソーシャルワークのメンタルヘルズ開発促進プロジェクト」の研修を進めている。

2. 目的と成果

若いソーシャルワークの卒業生及び修了生を対象に、

当財団ではアジアのバングラデシュ、カンボジアにおけるソーシャルワーク活動に対して支援活動を展開している。

学校におけるソーシャルワークの実践領域を紹介しスクールソーシャルワークやスクールソーシャルワークボランティアになるための学生向けの4日間のトレーニングを行った。

トレーニングの様々なセッションを通して、多くのリソース・パーソンが貴重な経験やスキルを共有し、参加者へ支援促進が図れた。

研修項目

- 1) 学校におけるソーシャルワークの実践とソーシャルワーカーの役割
*呼吸に合わせたエクササイズでメンタルケア(10代中心)
- 2) ボランティアリズム、社会福祉、ソーシャルワークの役割
- 3) 学校現場におけるソーシャルワーカーの役割



社会福祉育成活動推進支援事業

助成金給付事業

社会福祉法人、NPO 法人などや非営利任意団体等の事業に対し支援するものです。

開拓的である、緊急性があるが財政の裏付けがない、などにより日常的な事業の停滞を少しでもなくしてもらうように事業助成をしております。

2022年度は長く続くコロナ禍の影響でしょうか、150件を超える申請がありました。

社会福祉法人22、特定非営利法人(NPO)58、一般社団法人22、非営利任意団体18、他2に対し助成することになりました。

2022年度 ペイン記念奨学金 受給者決定

社会福祉実践分野のリーダーとしての人材育成を目的として、日本の大学院に在学する学生に年間100万円を限度として、授業料相当額を奨学金として給付しています。

2022年度の受給者は以下の4人。

本年度の同奨学金の受給者は次の通りです。

- TAさん 日本社会事業大学 大学院 1年
研究のテーマ 「児童養護施設職員の勤務継続を促進する要因」
- OTさん 日本社会事業大学 大学院博士課程 1年
研究のテーマ 「児童養護施設のケースワーカーが児童の支援を組み立てる中で抽象的になりやすい『養育方針』の策定プロセスの検討」
- KEさん 日本女子大学 大学院2年
研究のテーマ 「難治性てんかんのある人の相談支援を行うソーシャルワーカーの困難性とは何か」
- AYさん 立教大学 大学院博士課程 1年
研究のテーマ 「今後の若い視覚障がい者の権利擁護活動のあり方一障がい当事者団体の取り組みを通して」

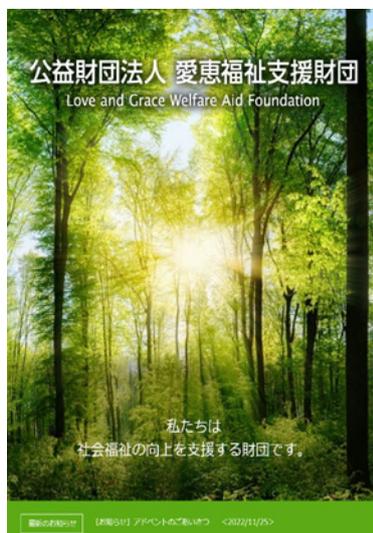
ホームページ リニューアル OPEN

11月末より愛恵福祉支援財団ホームページをリニューアル致しました。以下のQRコードより開くことができます。

愛恵福祉支援財団の活動や事業の報告を常に新情報として発信します。

是非ご覧下さい。

▼スマートフォンのカメラ等で下のコードをスキャンすると、ホームページのリンクが出てきます。



愛恵福祉支援財団 案内図

JR駒込駅 東口より徒歩2分
北区中里2-6-1 愛恵ビル5F
電話 03(5961)9711

